

循環と静止——ブルーエゴナク『バスはどこにもいかないで』

ざらついた空気

ブルーエゴナクの劇作品には、いつもその土地特有のざらついた空気が感じられる。『バスはどこにもいかないで』もまた、これまでと同じ土地の空気で満たされている。中年男性が昼から酒をあおり、若者は夜のクラブにたむろする。痩せた猫の吐しゃ物を老人が気にせず踏みつける。お世辞にも治安が良いとは言えない、おそらくは地方都市の郊外だ。

『ふくしゅうげき』(2017)や『ROMEO AND JULIET』(2019)では、その土地の閉鎖性から生じる軋轢や怨念があぶり出されていた。しかし、近年のブルーエゴナクの劇作品では、この小さな街に一つの希望を見出そうとしている。たとえば『あいのえんえん』(2020)では、豪雨によって開かれた街の避難所に集まる人々を軸に、互いの融和を描こうとした。『眺め』(2021)では、日差しと森という二人の人物の出会い直しを描いている。平たく言えば、ここで描かれる希望とは「人間の(また、それにまつわる事物との)関係性の修復」であって、『バスはどこにもいかないで』もその延長にある作品といえる。

巡回、死と生の境界線

物語は架空の街を走るバスの場面から始まる。金髪の女性ピアス(溝越そら)は、彼女のパートナー白川(青木裕基)に、バスの中でプロポーズをする。白川にとっては寝耳に水で、二人の話はすれ違う。バスに乗り合わせた中年男性・牛郎(日高啓介)を介抱するうち、ピアスは牛郎とともにバスを降車することになる。二人は離ればなれになり、白川は乗り合わせた女性・朝ノ日(高山実花)と引き続きバスに乗って目的地に向かう。

バスはこの街を巡回している。白川は、舞台上をぐるりと歩きながら、停留所の名前を列挙する。耳慣れない停留所の名から、彼らを取り巻く街のイメージが立ち上がる。にぎやかな中心街エリアから、人通りの少ないエリアへ。人工的な老人ホームから、あの世に行く前に立ち寄ると謂れのある場所へ。わずか90分の巡回バスのルートは、さながら銀河鉄道のように、生から死の道程、人間の一生を示しているようにも思える。

しかし、この作品は、生から死という単線的な時間の流れにも抗おうとする。物語の早い段階で、ピアスがオーバードーズ(薬物の過剰摂取)ですでに亡くなっていて、死者としてこの街をさまよっていることが明らかにされる。この作品では、生者と死者の線引きは曖昧化されている。

生きている者たちも過去のわだかまりを抱えたままで前に進むことができず、同じ毎日を繰り返している。そのうちの一人、まえこ(なかむらさち)は、認知症の老婆でありながらも、見た目は20代の女性。彼女はかつて息子の牛郎を出産する際、今は亡き夫に邪険にされたことをいまだに忘れられない。彼女が若い身なりのままでいるのは、肉体は老いながらも過去に執着しているからとも考えられる。

ピアスを失った白川もまた深い喪失のなかにいるのだろう。バスに乗り合わせた人々は、

何らかの理由で日常をループし、この街を徘徊し、それぞれの輪廻から抜け出せない。劇は、ピアスを起点にこのような人々の思い残しを解消しようとする。

関係性の修復、静止するバス

『バスはどこにも行かないで』というタイトルを耳にした時、それは切実な願望を表しているのかと思った。しかし、この「行かないで」とはバスの状況そのものを指している。ピアスは、自分の死に際を見て次のように言う。

そうだ、これは私の一日だけの again、やり直し バスはどこにも行かないで、私の前にずっと停まっている。で、何をやり直せばいいんだっけ？

バスは進みながらも静止している。この街にとどまっているおかげで、人々はもう一度会い直すことができる。ピアスは、たまたま居合わせた生きている者たちに介入し、それぞれのわだかまりを解消しようとする。それは、彼女の言う「一日だけのやり直し」だ。

「佐々木穂果」という名前がありながら、ほとんど本名を呼ばれずに亡くなったピアスは、それでも誰かをつなぐ媒介となる。たとえば、牛朗の妻・佳子（溝口竜野）は、まえこの介護や義理の父の墓参りで夫と疎遠になっている。ピアスは佳子に背負わなくてもいいしがらみであると論じ、彼女が想像する義理の父を一蹴する。また、これまでの生き方に負い目を感じている牛朗には、この街で自分と出会えたことの偶然を説き、彼の背中を押す。

ピアスは彼ら彼女らの葛藤を解き放つ役割を担っている。最後になってようやく白川に名を呼ばれるピアスだが、すでにピアスを乗せたバスは彼岸へと旅立っている。人々の関係性を修復させるのは、特定の誰かによる具体的な行為ではなく、名もなき死者との何気ない記憶にこそあるというメッセージとも受け取れる。

演劇の時間

ブルーエゴナクの作品では、生者と死者の線引きだけでなく、しばしば登場人物の背景も曖昧に示される。たとえば、白川と妹の初美（小関鈴音）は長いあいだ会えていないが、これが何に起因しているのかははっきりと分からない。電話では通じ合えるが直接出会えないという関係は、コロナ禍によって直に会う機会が失われてしまったイメージを敷衍しているようにも思えるが、作中で具体的に語られることはない。

このような省略は、時にブルーエゴナクの作品が難解であると言われる理由でもあるのだろう。その構えの大きさに対して、もう少し作り手側の方向づけをする必要だとも感じるが、一方でイメージの飛躍が彼らの演劇性を形づくっていることも確かである。音楽性をともなった台詞は作品を手がける穴迫信一の特徴で、本作では「おとぎ話」の有馬和樹による音楽や磯部友紀子による照明効果もまた作品の演劇性を支えていた。

ブルーエゴナクの作品は、日常的感性を時間的枠組を超えた寓話的世界へ接続しようと

試みる。「個」と「世界」の接続という意味では、近年におけるセカイ系文化も想起させるが、ブルーエゴナクの場合、日常的な実感をともなった描写の方が際立っている。地方都市郊外の見落とされた光景を穴迫は子細に描く。だからこそ、劇の時間が終わった時、私もそのどうしようもない現実をもう少しだけ頑張ってみようと思えるのかもしれない。

Text：須川渡